連載小説
まちおこし特命社員 石打悠太

「馬鹿者」を命ず！

第二十五回 まちおこしに暗雲 その四

渋谷和宏
イラスト●丹下京子

登場人物

石打悠太（いしうち・ゆうた） 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

青山麻衣（あおやま・まい） 24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。

出口栄（でぐち・さかえ） 38歳、大手通信会社のエリートサラリーマンだったが、家族とともに小海島に移住し、オリーブの栽培やオリーブ製品の製造・販売などを手がけるシマウミソラ社に転職した。

ショーン・次川（つぎかわ） 45歳、アメリカの投資ファンド、ヴィンセント・ファンド副社長。

亀田太（かめだ・ふとし） 29歳、伊予南市役所職員だったが、解雇され、伊予南プロジェクト社員に。

登坂美濃吉（とさか・みのきち） 68歳、大阪のホテルで料理長を務め、定年退職後、小海島に妻と移住、地中海料理のレストランのシェフになる。

榎太一（えのき・たいち） 76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。大渡晴美は娘、薫子は孫。

中林修（なかばやし・おさむ） 65歳、二名島バッテリーの秘書室長で榎太一の側近。

大渡薫子（おおわたり・かおるこ） 21歳、伊予南市長である大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ。

前回までのあらすじ
悠太と麻衣は、小海島のカフェ・シマウミソラの店長出口栄に会い、島への移住の動機が生き生きと働く高齢者たちの姿を見たことと知る。一方亀田は「伊予南市に復讐する」というショーン・次川の誘いが頭から離れない。

「亀田さん、あなたが本当はこの町を憎んでいるのだとしたら、どうでしょう、一緒に伊予南市に復讐してみませんか？」

亀田は次川を見つめた。

「この町が進めようとしているまちおこしのプロジェクトを滅茶苦茶にしてやるんです。痛快だとは思いませんか？」

次川は唇の端を歪ませた。笑みを浮かべようとしたのだろう。しかしその目は笑っていなかった。

亀田は次川から目を逸らそうとしたができなかった。それどころか食い入るように見つめてしまった。好奇心を抑えられなかったのだ。

「どうしようと言うんですか？」

ふいにそんな質問が口をついて出た。

「具体的なプランはまだ固めていません。選択肢がありすぎましてね。何よりも亀田さん、あなたはまちおこしを担う伊予南プロジェクトの社員なんです。『発注すべき物を発注しない』『情報を誤って伝える』——そんなことをするだけでも伊予南フェアの準備は大混乱に陥るんじゃありませんか？」

「でも、そんなことをしたら僕は叱られちゃいます。最悪の場合、辞めさせられてしまうかも……」

「構うことないじゃないですか」

怖気づく亀田を次川は鼻で笑った。

「それにあなたの処遇については悪いようにはしませんよ。あなたは安心して自分の気持ちに正直になっていいんです」

「亀田……おい亀田！」

後ろから肩を叩かれ、亀田は「ひえっ！」と叫び声を上げた。

広岡が背後に立ち、怪訝な顔をして亀田を見下ろしている。

「お前、昼飯に悪いモノでも食ったか？」

「あ……いえ……」

「お前、今、暇だよな。ちょっと頼まれてくれないか。小笠原のところに行ってほしいんだよ」

「小笠原って……あの小笠原さんですか？」

「ああ、日下部地区の〝頭〟の小笠原だ」

亀田の顔から血の気が引いたが、広岡は気にも留めずに続けた。

「さっき小笠原から電話があって、日下部地区の生産者たちが伊予南フェアに出品する予定の商品が揃ったそうだ。そいつを受け取って、ここに戻ってきたら大渡市長のところに届けてほしいんだよ。俺はこの後、新庄とやっかいな話をしなければならないのでどうしても外出できないんだ」

「僕、行かなければダメですか？」

「ああ、大渡市長、『伊予南フェアに出す名産・特産品は全部、私がチェックするから』と言い張っているんだよ」

亀田は「小笠原のところに行かなければダメですか？」と聞いたつもりだったのだが、広岡は「大渡のところに……」と誤解したらしい。

「小笠原も大渡市長も気が短いからな。すぐに行ってくれよ。頼んだぞ」

広岡は亀田の肩をもう一度叩いた。

秘書室長の中林修は例によってかしこまった顔で社長室のドアを開け、榎に向かって几帳面にお辞儀した。

「お忙しいところお時間をいただきまして誠に申しわけ……」

「決まり切った前口上はいいよ。どうだった？」

榎は中林をソファに座らせ、向かいに腰掛けた。

「結論から言いますと、ショーン・次川ですがやはり何か企んでいる印象です」

中林はポケットから写真を出し榎に渡そうとしたが、榎は顔の前で手を振った。

「前にも言っただろう？　興信所の探偵が撮った写真を見るのはどうにも好きになれない。説明だけでいいよ」

「次川は複数の伊予南市の人間と密かに面会しています。一人は市役所の元職員で今は伊予南プロジェクト社員の亀田太という若い男です。昨晩も駅前の居酒屋で話をしていました」

「亀田太……聞き覚えがある名前だな」

「再三、問題を起こして、市役所を解雇された男です」

「ああ、晴美が言っていた。器物損壊で書類送検されたんだったな。次川が問題児と接触か。どうも嫌な感じだな」

「次川が接触した相手はそれだけではあり

大正大学地域構想研究所ホームページ（http://chikouken.jp/chiikijin）では、連載小説「『馬鹿者』を命ず!」のバックナンバーを閲覧できます。

まちおこし特命社員
石打悠太
「馬鹿者」を命ず！

ません。もう一人、どなただか見当がつきますか？」
「いや……」
「もう一人は薫子さまです」
　榎は目を見開いた。
「薫子はどこで次川と会っていたんだ」
「薫子さまの大学近くの喫茶店です。次川が薫子さまを訪ねていったようです」
「どんな話をしていた？」
　中林は残念そうにかぶりを振った。
「探偵によれば、近くのテーブルは他の客ですべて埋まってしまっていたそうです。そのせいで『古民家』とか『石打』といった言葉が断片的に耳に入っただけでした」
「石打……石打悠太か……」
　榎は眉根を寄せ、思案顔をした。
「中林、もう一つ頼まれてくれないか」
「何なりと」
「探偵に亀田太も見張らせてくれ。そして何かあったらすぐに私に報告するんだ。いいか、すぐにだぞ」

　オリーブ記念館のレストランを出た出口は建物の裏手にある展望台に悠太と麻衣を案内した。
「綺麗！」
　景色を見下ろした麻衣が感極まった顔をした。
　悠太も同感だった。眼下に広がる群青色の海は陽光を浴びて鏡のようにきらめき、大小いくつもの島影を背景に連絡船が白い航跡を描き静かに海面を滑っていく。海へと続く山の斜面にはオリーブの木が群生し、その柔らかな緑が目を癒やしてくれる。いつまでも眺めていたい絶景だ。
「この景色を見ていると寿命が延びるような気がしませんか？」
　出口の問いかけに悠太と麻衣は同時に「確かに！」とうなずいた。
「この島にはこんな素晴らしいビューポイントがそれこそ数えきれないほどあります。そのためか仕事が立て込んでいてもあまりストレスが溜まらないんですよ」
「あの……出口さん、もう一つ、お願いしていいですか？」
　悠太が言った。
「オリーブ記念館で働いているお年寄りの方にお話を聞くことはできないでしょうか？　なぜこの島に移住されたのか、どんなところが気に入ったのか、ぜひ教えてもらいたいんです」
「かまいませんが、レストランの終了時刻は午後八時です。それからでも大丈夫ですか。四国本島行きの連絡船は午後八時三十分が最終ですから今日のうちには帰れなくなってしまいますよ」
　悠太は一瞬迷ったが「大丈夫です」と言った。
「今日はここで一泊します。どこかしら空いていますよね？」
「それはもう、今日は平日ですからね。そういうことなら私がお薦めの宿を紹介しましょうか」
「ありがとうございます！」
　悠太は頭を下げ、麻衣をちらりと見た。
「あたしも泊まるわよ」

　出口が紹介してくれたのは小高い山の頂上に建つ小体（こてい）なホテルだった。フロントロビーは海に面した側が全面ガラス張りで、連絡船が行き交う港を見下ろせる。
「八時に迎えに来ます」
　出口はそう言い残して車に乗り込んだ。
　悠太は走り去る車に深々と頭を下げ、フロントでチェックインの手続きをした。
「あたし、悠太と一緒の部屋でもいいのよ」
「そうはいかないよ。もう恋人同士じゃないんだから」
　悠太は冗談めかして言う麻衣にキーを渡した。
「八時までどうするつもり？」
「悠太は？」
　悠太は腕時計を見た。時刻は午後三時十五分、出口が迎えに来る八時までにはだいぶ時間がある。夕食にももちろん早い。
「そこらへんを散歩でもしようかな」
「それならあたしも付き合うわ」
　ホテルの正面玄関で麻衣と待ち合わせた悠太は連絡船の港を目指して山道を下った。二車線の舗装道路はつづら折りになってなだらかに下り、道の両側に連なる樹木が途切れるたびに海が姿を現わす。何だか夢のような光景だった。
「あたし、本当にここに移住しようかな」
「麻衣のことだからきっと一カ月で飽きるよ」
「そうかしら」
「そうさ」
「悠太、なぜレストランで働いているお年寄りに話を聞いてみたいと思ったの？」
「どうしてあんなに生き生きとして楽しそうなんだろうと興味を引かれたんだ。ここでの仕事や生活のどこがいいのかなって」
「もしかして……」
　麻衣が興味深げに悠太の顔を覗き込んだ。
「悠太もここに移住したくなったの？」
「そうじゃないよ」
　悠太は麻衣から顔を背け坂道を下った。
　樹木が途切れ、眼下にオリーブの広大な農園が見えた。目に優しいオリーブグリーンの絨毯（じゅうたん）が息を呑むほど美しい。
「素敵ね」
「ああ」
「あたし、もし悠太が移住に関心を持ってくれたら嬉しいなって思ったの」
「どうして？」
「だって二人でここに暮らせたら素敵じゃない」
　悠太は足取りを速めた。
「ちょっと待ってよ！」
「お年寄りの方に話を聞いてみたいと思ったのは仕事のためだよ。伊予南市をお年寄りの方たちがぜひ住んでみたい町にできないだろうかって思っているんだ。アルベルゴ・ディフーゾの考え方を取り入れ、再生した古民家に旅行者を泊めさせるだけじゃなくて、そんな旅行者たちに移住してみたいと思ってくれるようなきっかけを与えられないだろうかって。もしかしたらその鍵を握るのがお年寄りの方たちなんじゃないかって考えたんだよ」
　麻衣がよくわからないという顔をした。
「つまりさ、うまく言えないんだけれど、お年寄りの方たちが移り住んでくれて、幸せになってくれたら、もしかしたらそれが若い人とか他の世代の人たちの呼び水になるかもしれないって思いついたんだよ。あ、でも……別にはっきりした根拠があるわけじゃないんだ。ただ漠然とそう思っただけで……」
「そう言えば出口さんもおっしゃっていたわね。ここで働いているお年寄りたちがとても幸せそうで、生き生きとしているのを見て、奥さまが移住に前向きになってくれたって」
　麻衣は遠くを見る顔をした。
「あたしにも出口さんの奥さんのような気持ち、どこかにある気がするな。毎日忙しくしていて、ふだんは先々の人生とか生活なんて突き詰めて考えたりしないけれど、一人きりになったとき、ふと四十年、五十年先までずっと幸せでいられるのかなって思いを巡らせたりすることがあるの。どこかで将来に不安を感じているのかな？」
「かもね、年金とか社会保障とかいろいろあるものね」
「人口が減っちゃうとか町や村がなくなっちゃうとか」
「暗い話、やめようか？」
「悠太が先に言い出したんでしょう？」
　麻衣は唇を尖らせ、それから笑顔になった。
「何だか昔に戻ったみたいだと思わない？　付き合っていたころ、よくこんな会話をしたわよね」
「そうだったかな」
「悠太、忘れちゃったの？　もしかして薫子さんだったっけ、あの娘（こ）のことが好きな

の？」
「そんなんじゃないよ。前置きなしにいきなり変なことを言わないでくれよ」
悠太は急ぎ足で坂道を下った。

広岡からもらった手描きの地図を頼りに、何度も道に迷いながらようやく小笠原の作業場にたどり着いたとき、時刻は午後三時半を回っていた。伊予南プロジェクトのオフィスがある市庁舎の別館を出てから一時間半もかかってしまったことになる。広岡の地図が悪いというよりは、小笠原に会いたくない気持ちが道に迷わせたのかもしれない。

廃校となった小学校の裏手に車を停めた亀田は、林道の脇に建つ古びたプレハブ小屋のドアをノックした。
「入ってくれ」
小笠原の野太い声がした。
亀田は慌ててマスクをかけ、ドアを開けた。甘酸っぱい香りがマスク越しに鼻腔を刺激する。
「遅かったじゃないかよ。あれ、広岡さんじゃないのか」
「代理の者です」
「まあいいや。果物も加工食品も全部、この段ボール箱に入っているから持って行ってくれ」

亀田は段ボール箱を持ち上げた。重くて腰を痛めそうだが、一刻も早くここから立ち去りたくて思いきり力を入れる。
「ちょっと待てよ。お前……」
小笠原が近づき、亀田のマスクをはぎ取った。
「ああっ！」
段ボール箱を足の上に落としてしまい亀田は悲鳴を上げた。
「お前か！」
小笠原は段ボール箱が乗っていない亀田のもう一方の足を踏んづけた。
「ああっ！」
亀田が再び悲鳴を上げる。
「お前、ちゃんとやっているんだろうな？」
「はい……」
「本当だな？　今度悪さをしたら足腰立たなくしてやるからな。ほら、とっとと持っていけ！」
亀田は重い段ボール箱を抱え、逃げるように車に戻った。助手席に段ボール箱を置いてシートベルトを締め、エンジンをかける。

屈辱と痛みと恐怖とで涙が流れた。小笠原の奴、亀田より七つ年下だというのに相変わらず居丈高で暴力的だ。
以前、亀田が広岡の別れた妻に「ここに住むのがどうしても嫌なら一時的に別居してもいいのではないか」と言い、それが別居への背中を押してしまったときもそうだった。

小笠原は市役所に怒鳴り込んできて亀田をさんざん罵り、「今度余計なことをしたら足腰を立たなくしてやるからな」と捨て台詞を遺して去っていったのだった。
それだけではない。亀田が高校生だったころ、人一人通るのが精一杯の路地で小学生だった小笠原と鉢合わせしたことがあった。

亀田が道を譲らなかったのに腹を立てた小笠原に足を思いきり踏んづけられ、そればかりか背負い投げで投げ飛ばされてしまった。
亀田は自分よりはるかに体が小さい小学生にやられてしまった屈辱と痛みと恐怖とで泣きながら家に逃げ帰ったのだった。
たぶん小笠原は覚えていないだろう。しかし亀田にとっては忘れようとしても忘れられないこの町での嫌な思い出の一つだった。

小笠原の作業場を後にした亀田は日下部川沿いの道を走り、市街地へと続く橋を左折した。
ふと段ボール箱をまるごと川に捨ててやろうかという企みが頭をもたげた。
小笠原以下、日下部地区の生産者たちが伊予南フェアに出すつもりでいる名産・特産品を、果物も加工食品も全部、〝川の藻屑〟にしてやるのだ。
「ざまあみろだ」
亀田はブレーキに伸ばしかけた足を止めた。

いや、まだ早い。今、それをしてしまったら広岡と新庄に叱責されるだろう。場合によっては警戒され、伊予南フェアの仕事から外されてしまうかもしれない。
伊予南フェアを滅茶苦茶にするために最も効果的なタイミングを見計らって実行するのだ。

午後八時を十五分ほど回ったころ、出口は六十代半ばのよく日に焼けた男性を伴い、ホテルに姿を現わした。
「ご紹介します。オリーブ記念館のレストラン・オリーブの登坂美濃吉シェフです。石打さんがお話を聞きたがっているとご相談したら、『それなら今から一緒にホテルに行くよ』とおっしゃっていただいて」
「わざわざいらっしゃっていただいて申しわけありません」
頭を深々と下げた悠太に登坂は笑顔で手を振った。
「いやいや、このホテルのバーテンダーがつくるカクテルは絶品でね。久しぶりに味わいたいと思ったんですよ。ここのバーで話をするというのでよろしいですね？」
悠太と麻衣は同時にうなずいた。
ロビーの奥にあるバーのソファに四人は腰を下ろし、登坂はギムレットを、悠太と麻衣はビールを、出口はノンアルコールワインを注文した。
「なぜこの島に移住したのか、それを聞きたいんだそうですね？」
登坂は豊かな銀髪を撫でつけ、脚を組んだ。がっしりして血色が良く、いかにも健康そうだ。
「うまく理解してもらえるかどうかわかりませんが、短く言うとこういうことです。ここは故郷に似ているけれど故郷じゃない。だから嫌な思い出もしがらみもないうえに毎日、新鮮な発見がある」
「嫌な思い出がない？」
登坂は麻衣に向かってうなずいた。
「我々のような田舎で生まれた人間にとって、故郷は必ずしも良い思い出ばかりじゃないんですよ」

まちおこし特命社員
石打悠太
『馬鹿者』を命ず！

Kazuhiro Shibuya
作家・経済ジャーナリスト・
大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜市生まれ。
日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、
『日経ビジネス』発行人などを務めた後、
2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー
『銹色（さびいろ）の警鐘』（中央公論社）で作家デビュー。
TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。